

り上げつつある問題ではあるが、「そんなこと言ったって学歴社会は現実にあるのです。」という現状を強調する一言で遮られてしまいそうである。

幼児期に著者が述べたような健全な自己意識を育てることができたら、それ以後の教育がたとえ全く違う価値観で授けられたとしても、満遍なく与えられたことをこなす人間ではなく、自分の好きなこと、得意なことを選び、それを伸ばしていく人間に育っていきけるだろう。それが著者のいう

人生の成功かどうかは定かではないが、少なくとも幸せな人生ではあるだろう。急げ急げの流れに乗らずに、子どもが今大切にしていること、まさに立ち向かっている課題を大切にできる大人であり、親でありたいと思う。時代が変わっても変わらずに受け継がれなくてはならないことをしっかりと見据えていくためにこの書はまさに私にとって心強い一冊である。

(お茶の水女子大学)

ベッツィ・バイヤースはいかがですか

『白鳥の夏』(掛川恭子訳 富山房)

『うちへ帰ろう』（谷口由美子訳 文研出版）

入江 礼子

ベッツィ・バイヤースは、一九六〇年代に作家活動に入ったアメリカの児童文学者です。アメリカの児童文学界で、最も権威のあるとされる「ニューベリー賞」をこれから御紹介する『白鳥の夏』で受賞したのをはじめとして、旺盛な作家活動の中で得た様々な賞は数えきれません。

彼女は一九二八年、合衆国、ノースキャロライナ州の生まれで、四人の子どもを育てながら、作家としてのキャリアを積んだ人です。作家年鑑の中で、彼女は、自分が、本の構想を、ねっている時、そういう時は、よく親指の爪をかんだりしながら、ポーツとしているのだそうです。すると、子ども達が走りよってきて、「ねえ、お母さん、

スカートのすそがほころびちゃったからおおしと」とか「早くこのブラウスにアイロンかけてよ」「まだ、あの服、洗濯してくれてないの」というように、次々に、母にして欲しいことを言うてくるのだそうです。子ども達には、母が本の内容のことで頭がいっぱいだとはわからず、ただ、暇そうにみえるのでしょう。いくら、「今ね、頭の中で、お話の中味を考えているから、いそがしいのよ」といっても信じてもらえず、遂に、子ども達に、「わかった。お母さんは、洗濯がきらいなんですよ。だから、そう言っているのね。言い訳だわ。」と言われてしまったそうです。ウーム、家の中で、仕事をすることは、子ども達に、

母親は今、家において暇なんだなと見えてしまう分、大変なんだな……などと感心したり…。

さて、そういう時代を通じて、ずっと作家活動を続けた人ですが、キャロライナという南東部の比較的、田舎ということもあってでしょうか、彼女の小説の多くは、日々の生活の中での体験をもとにしたものが、題材に選ばれることが多いように思えます。

そんな中で、今回は、二つの読み物を御紹介しようと思います。

『白鳥の夏』 (掛川恭子訳 富山房)

アメリカでは一九七〇年に出版され、日本では一九七六年に訳されました。

サラが、十四歳の夏のことです。サラの母親は、既になく、家には、ちょっぴり口うるさい叔母のウィリー、皆から美しいといわれている姉、二度の大病の末に脳に障害を持った弟のチャー

リー、それに出稼ぎにいがしく家のことは、叔母にまかせっきりの父親がいます。十四歳といえ、物思う季節、サラも、この例にもれず、家族がバラバラだという状態も加わって、不安感と、自信喪失の状態に陥ってしまいます。

今迄十四年間は、さして波風立たずに過ぎてきたのに、ここへきて、何もかもが、腹立たしく、そして、同時に、今迄あった自分に対する自信さえも失ってしまうのです。

姉のワンダはきれいでその上ボーイフレンドもいるのに、この私ときたら、決してきれいじゃないし、足も大きい。叔母は、いつも私におしつけがましいし、障害を持った弟のチャーリーでさえ、なんだかお荷物のように感じる。

こんな折、チャーリーが、近くに飛んで来る白鳥を見に出掛けて、行方不明になってしまいました。サラは、お友達や近所の人々と共に、チャーリーを捜し回ります。そうするうちに、彼女の心

の中でバラバラになって、くずれそうになっていたものが、徐々に形をなし、今までの思い込みも少しずつとけはじめます。人の心が入り込んでくることによって今度は、人の心にも一歩踏み込んで考える余裕ができたといえるでしょうか。チャーリーは、サラの崩壊する寸前の心を、偶然の事件を通してではありましたが、くい止めることになったのです。

この本は、「家族」というものが改めて問い直されはじめた七〇年代初頭に書かれています。この本の中に出て来る父親の影の薄さなどを考えると、今の日本の状況とも、どこか重なり合い、考えさせられています。

『うちへ帰ろう』（谷口由美子訳 文研出版）

日本では、あまり一般的ではないのですが、合衆国で一般的なことの一つに、「里親制度」があ

ります。家の事情で、本当の親に育ててもらえない子ども達は、里親のところまで育てられます。ところが里親も人間、時には、いえ、しばしばその里親と合わず、里親家庭を転々とするはめになる子ども達もかなりいるのです。

そういう背景のもと、この本は書かれました。原題は、『ピンボールド』といって、パチンコ玉のように、どこに落ちつくかわからない、その行き先のわからなさ、不安さをあらわしています。

メイソンさんという里親のもとで、偶然育てられることになった三人の子ども。ハービーと、トーマス・Jと、キャリー。それぞれに里親に出されるまでの背景があり、メイソンさんの家でも、最初のうちは反目ばかり。色々のぶつかりあい、事件を通して、三人が自分に目覚め、お互いを認め合っていく過程がえがかれています。その過程は決して甘いものではありませんし、「自分で立つ」しかない、アメリカの状況もかいま見ら

れます。

一体、何が人を人として育てるのだろうかとか、考えさせられてしまう一冊です。

この本は、一九七七年に出版され、八三年に日本語訳が出ました。

彼女の本は、まだまだ沢山あるのですが、カニグズバークや、バージニアハミルトン、ベバリー・クリアリーのようには沢山は、日本語訳がまだ出ていません。

まず、この二冊、暑い夏にひもとかれ、サラと、ハービー達に出会われることを願っています。

(母子愛育会家庭指導グループ)

新現代幼児教育研究会

第十四回オンステージのお知らせ

日時 八月二十二日(日) 講演九時三〇分、
実技一時三〇分

講師 外山滋比古先生 堀合文子先生

会場 十文字学園講堂

問い合わせ 〇三(三九一八)一六六八

